

愛知県西三河地域における同族集団の現在

岡崎市額田地区 A 屋敷を事例として

Today's Do-zoku Group in Nishi-Mikawa area, Aichi Prefecture:

A Case Study of A-Yashiki in Nukata District, Okazaki City

青山真由美

【要約】

日本の村落社会研究において、かつては多くの農村社会学者が同族研究に焦点を当ててきた。しかしながら、近代化により土地所有の変質とイエ意識の解体化、農民層の分化・分解などが起きると、同族集団自体が衰退あるいは解体していき、その結果、同族研究はほとんど議論されなくなった。現在においても同族集団が機能している事例が確かに存在する以上は、それらを研究対象の外に置いて見過ごしてしまうのには問題がある。

そこで本稿では、現在でも残存している同族集団の事例として、愛知県岡崎市額田地区の同族集団「A 屋敷」を取り上げる。消失していないのが不思議な同族集団がなぜ現在も残っているのか、それが近代化の中でどのように変容し、現在どのような形で存在しているのか、その場で実際に何が起きているのかを明らかにするために、日常生活のネットワーク分析と、行事参加に関するブル代数分析を行った。

ネットワーク分析の結果、A 屋敷の中には垂直的な関係は存在せず、60 代の農業従事者を中心に日常会話において緊密な紐帯が形成されていた。日常面においては、近代化によって屋敷全体の結合は解体し、選択的で緊密な関係が作り出されているといえるだろう。またブル代数分析の結果、結合を維持する行事への関与については、世帯主の「世代であること」と、世代は関係なく「文化的継承と誇り・アイデンティティがあること」の2つの要素が存在することが分かった。

キーワード：同族、地域社会、近代化

1 問題関心の所在

日本の村落社会研究において、かつては多くの農村社会学者が同族研究に焦点を当ててきた。戦前、農業生産の共同性を基底的要因として形成される村落共同体の中で、行政村と生活協同体の構成単位として機能していた近世初期の「家」を継承する形で形成された同族集団は、行政村的レベルにおいても農業という生活協同体的レベルにおいても、村の構造の基礎単位として存在していたからである（長谷川ほか 1991）。したがって、同族集団は村落社会を理解する上での本質的・根源的なものであり、同族集団を理解し把握することが、村落社会を理解することであったといえる。

同族に関する理論は、有賀や喜多野などの研究に代表される。有賀（1971）は、同族の構造を、本家分家の経済的格差を基盤とした本家に対する分家の従属として説明し、機能

としては、生活保障の拠り所としての家業経営を重視した。喜多野（1976）は、ウェーバーの家父長的支配論を適用し、本家の権威や系譜的本源性に基づく分家の従属として本家分家関係を説明した。このように、本家分家の間の垂直的結合関係が、同族理論の典型であった。

しかしながら、戦後の急速な社会的変容により、土地所有の変質とイエ意識の解体化、農民層の分化・分解などが起きると、村落の枠組みは大きく変容した。農民の生活や意識などが多様化・複雑化したことで、従来の村落内部の論理のみでは農民の生活体系は説明できなくなり、旧来の生活組織が実質的な基盤を徐々に喪失していったのである。この過程の中で、同族理論については、典型的な本末関係を否定したり（例えば、長谷川ほか〔1991〕等）、村落構造の変容過程と関連させて同族集団の変容を説明したりしようとする動きが現れた（例えば、河村ほか〔1958〕等）。安藤ほか（1979）によると、同族結合は、「伝統」の継承によってイエ意識の残存を示しながらも、本質的機能と考えられる先祖祭祀などの宗教的色彩が薄くなり、儀礼的要素に限定し、娯乐的・親睦的性格を濃厚にしているという。同族結合は構造的分立・フラット化・親類関係化・潜在化として類型化される構造的解体の過程にあると考えられる。

このようにして、同族集団自体が社会変容の過程で衰退あるいは解体していった結果、社会学において盛んに行われていた同族研究は停滞していき、今ではほとんど議論されなくなった。農村社会の研究は、農業・農民問題や家族の研究などの個々のテーマに目を向けたものか、地域社会論やコミュニティ論など農村社会を「地域社会」として包括的・総合的に捉えたものへと移行していった。

だが、同族集団は完全に解体したわけではない。現在においても同族集団が機能している事例は確かに存在する。したがって、同族を現代社会とは無縁の過去のものだと見なすのは正しくない。「典型」的な同族集団が全体的に消失したからといって、現在残っている事例を研究対象の外に置いて見過ごしてしまうのは、問題があるように感じる。むしろ、消失していないのが不思議な同族集団がなぜ現在も残っているのか、それが近代化の中でどのように変容し、現在どのような形で存在しているのか、その場で実際に何が起きているのかを、きちんと分析する必要があるだろう。

以上の前提に基づき、本稿では、現在でも残存している同族集団の事例として、愛知県岡崎市額田地区の同族集団「A屋敷」を取り上げる。有賀や喜多野などの古典的理論と比較してどのようなものであるか、それらの理論に当てはまらないとしたら何の要素が同族結合を維持しているかという視点で、集団内の関係構造や機能的側面を分析していく。また、変容過程という点では、現在の結合が近代化以前の結合の残存、すなわち上の世代の構成員のみの部分的な残存に過ぎないのか、それとも新たな世代を巻き込む要因が働いているのか、にも目を向ける。

2 調査対象地域と同族集団「A屋敷」の概要

2.1 調査対象地域の概要

調査対象地域である愛知県岡崎市額田地区は、三河地方のほぼ中央部に位置する中山間

地域である。人口約 9000 人で、人口推移はほぼ横ばいである。総面積 160.27km²のうち山林面積が 90%程度を占める。地区の南西部は旧岡崎市などの都市的な地域に接し人口や産業などが集積している一方、北部や東部は自然環境豊かな農山村地域で、新城市作手地区（旧作手村）や豊田市下山地区（旧下山村）・松平地区などの三河山間の地域に接している。2006 年、隣接する岡崎市と合併し岡崎市となったが、それ以前は額田郡額田町という 1 つの市町村を形成していた。

ところで、三河地方は同族集団が比較的残存している地域である。これは、主に西三河地域にトヨタ系企業などの製造業が集積していることが影響していると考えられる。車で通勤可能な距離に大量に働き口が存在しているため、地域外への人口流出が少なく、結果同族結合を維持しやすいのである。特に額田地区は、旧岡崎市や豊田市に隣接しているため、他の中山間地域よりも恵まれた地理的条件にある。このように、同族集団の残存が地域構造として特徴づけられる地域であったため、本地域の中の同族集団を調査対象に設定した。

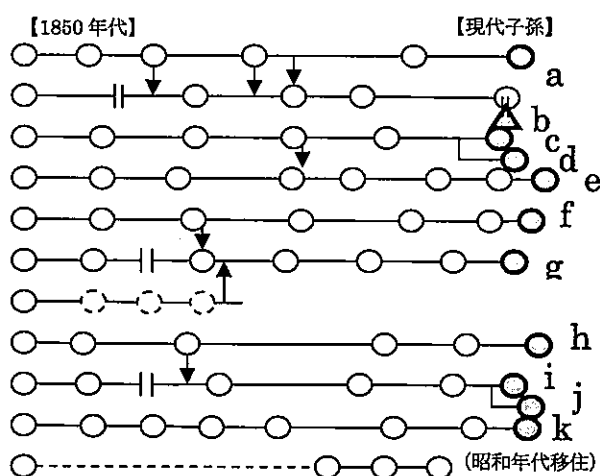
2.2 同族集団「A 屋敷」の概要

「A 屋敷」とは、額田地区原集落の中で、A 姓を持つ人々の間で形成されている集団である。この集落では現在、全 101 世帯中、24 世帯が A 姓を名乗っている。したがって 24 世帯により「A 屋敷」が構成されるわけだが、各世帯の血縁的な性質によって 2 つの集団に分かれる。共通の先祖を持つ血縁的集団としての「A 屋敷」と、明治期に新たに A 姓を名乗った個々の家の集合体としての「A 屋敷」である。前者が本稿で扱っていく集団である。以下の「A 屋敷」は、全て前者を指す。但し、2 つの A 屋敷同士や屋敷外の家々とは地理的に分離して居住しているわけではない。この地域は元々、2 つの A 屋敷とごく僅かの S 家しか居住していなかったのだが、明治 20 年頃の水害による一部世帯の家屋移転や昭和 40 年代以降の急速な人口流入によって、2 つの A 屋敷も他姓の家々も混在するようになった。したがって、近隣関係が同族と一致しているわけではなく、それぞれが集落内の異なる伍長組に所属している状態である。また、姻戚について、現在の世帯主の一世代前までは同族内結婚があったものの、現在の姻戚は全て地域外にある。

A 屋敷の由来は、天平時代から続く由緒ある武士の家系と言われており、1400 年以降に先祖が他地域から移住してきて土着したのが、原集落における A 屋敷の始まりである。この時期以降、土着以後の系譜は明らかではないが、現存する史料から、1850 年代以降の系譜は以下のように表される。屋敷内の各家や構成員の記述については、各家にあてたアルファベットを用いて表記する。

これによると、現在の世帯主の世代で分家が 2 戸できてはいるが、系図が樹形図のような枝分かれ、すなわち有賀や喜多野の理論のような垂直的本来分家の形態をとっているのではなく、それぞれの家がほぼ単線になっていることが分かる。むしろ、A 屋敷内で盛んに養子や婚姻が行われ、お互いに助け合って家系の断絶を防いでいる印象を受ける。それが家間の垂直的関係性あるいは水平的関係性に由来するのかは定かではないが、少なくとも 1850 年代以降の系譜においては、典型的な本来分家関係は確認できない。

現在の A 屋敷では、具体的には、お盆と正月に各世帯の代表者が集結して屋敷内の各家



※ここでの系譜はあくまで世帯主限定して表したものであって、女性や次男・三男の移動は史料として明確に残存していないため把握しにくい。
※図の矢印は養子の授受などを表す。

図1 1850年代以降のA屋敷の系譜

の仏壇を参詣するとともに屋敷の構成員に挨拶を交わす「お屋敷参り」と、3月4日に一族の祖先が祭つてある社に参つて会食を行う「お日待ち」という行事が、毎年必ず全世帯参加のもとで行われる。また、葬式などの際には、屋敷内で集まって料理や運営などの裏方の仕事を担当し、その家族のサポートを全面的に行う。この場合、A屋敷がほとんどの仕事を担うため、地域の伍長組が「葬式組」として手伝うようなことはない。家屋の建て替えなどの際には、手伝いに行ったり、全世帯が出資してお祝いの品を贈ったりする。その他、定期的なものではないが、過去にはA屋敷の祖先とゆかりのある場所への日帰り旅行を一部構成員が企画し、有志を募って出かけたこともある。

3 A屋敷内の関係構造：世帯主のネットワーク分析より

現在の屋敷内の関係構造はどのようなになっているのか。日常生活における関係性、とりわけ個々の世帯の間関係構造について分析を試みたい。

従来の同族研究では、家の系譜関係に基づく本家—分家の垂直的関係性、あるいは葬儀等の互助的な関係性に力点が置かれていた。しかしながら、戦後の社会変容によって多くの同族が構造的に解体し、同質的な生活協同体としての機能も喪失している以上、集団全体を分析する従来の方法では、異質化した同族内各構成員の関係構造を捉えることは難しい。そこで、本研究では新たにネットワーク分析を採用する。ネットワーク分析を用いることで、各構成員間の社会的交換の種類や各構成員の位置、つき合いの活発なグループなど、全体的な分析では見えてこなかった各構成員間の関係を詳細に分析できると考えられる。

屋敷の構成員の間でどのような交流・つき合いがあるのかを全世帯に尋ね、それをもとにネットワーク分析を行った。以下、①方向性のない関係を表す無向グラフ、②関係に方向性がある状況を表す有向グラフ、③どの家が「有力」であるかを点数化した有力スコア（声価法）、の3つの分析を用いて考察する。

有賀などの先行研究において、本家一分家の系譜関係の相互承認が同族の重要な要素として挙げられている以上は、屋敷内の関係が垂直の関係か否かを確認する必要がある。だが、系譜の上では垂直の本家分家関係が確認できておらず、また、構成員の認識の中にも、「あの家が大本家だ」というものはない。i 家世帯主の話によると、「屋敷内の上下関係は、血筋というよりそれぞれの時代に金持ちかどうかによるもの大きい。でも、戦後農業をやらなくなると、そういった関係はなくなってきた。」ということである。現在の世帯主の1, 2世代前にあたる大正年代から戦時中の、家業の養蚕による収入と収量のデータ（豊富村教育委員会編 1956）によると、収入も収量も屋敷内で明確な格差が存在していた。この点を視野に入れて、現在のネットワーク構造をみてみよう。以下の無向グラフ・有向グラフ・有力スコアは、全世帯に行ったヒアリングの際に記入していただいた質問紙をもとに作成した。調査時においては、「世帯主もしくはそれに準ずる構成員」¹⁾と「女性構成員（主に世帯主の妻）」に分けてそれぞれのソシオグラムを作成したが、両者は同質的な構造であったため、ここでは世帯主のもののみを取り上げる²⁾。

①無向グラフ

屋敷内の社会的交換の有無とその種類を見るために、日常生活において行われると考えられる接触・交流を具体的に表した6つの項目（「情報交換」、「井戸端会議」、「買い物」、「娯楽・遊び」、「墓参り・掃除」、「地域活動に一緒に行く」）について、「ある」と答えた家同士を直線で結び、ソシオグラムを作成した。但し、以上6項目はその性質によって、（ア）日常の会話レベルの接触（「情報交換」、「井戸端会議」）、（イ）娯楽や外回りの活動（「買い物」、「娯楽・遊び」）、（ウ）集落内での活動（「墓参り・掃除」、「地域活動に一緒に行く」）の3つに分類できるため、ソシオグラムは便宜上3項目で表した。なお、各ノードは、地理的な位置関係（地図に示される各家の位置）に基づいて配置した。

以下、ネットワーク密度とネットワーク中心性を用いながら分析する。但し、ソシオグラムの各項目の次数は非常に小さい。3項目とも社会的交換を表すという共通性が見られるため、ネットワーク密度および中心性については全項目を一括して計算する。

ネットワーク内の関係の密接度を表すネットワーク密度を、「実際の紐帯の数/最大可能な紐帯の数」という計算式で算出すると、0.18となる。数値上それほど高くないのは、項目の中に全く紐帯がみられないものが存在するためである。

また、ネットワーク中心性について、中心性を「各ノードの次数」と定義すると、中心性の高い方から順に、「i→c→b→h→f→k→j→a・g→d・e」となる。特に、i・k・b・cなどの農業従事者（60～70代）の中心性が高い。彼らは空間的に近い範囲で生活しているため、日常生活での交流機会が多く、非常に緊密なネットワークを結んでいると考えられる。昔から農業を営んでいる彼らは、現在でも昔からのネットワークを維持しているのである。

一方、ソシオグラムの左側の方に位置する家は、世帯主が比較的若く（50代）、額田地区外へ勤めに出ている人が多い。地区外で生活の大半を送るため、必然的に交流機会も少なくなってくるのであろう。つまり、日常生活で緊密な関係を持つかどうかという問題には、世代と勤務地という要因が深く関わっていると考えられる。

また、各項目について見ると、ネットワーク密度が高いのは「情報交換」と「井戸端会議」という、日常の会話レベルでの交流・接触を示すものである。一方、「買い物」の項目

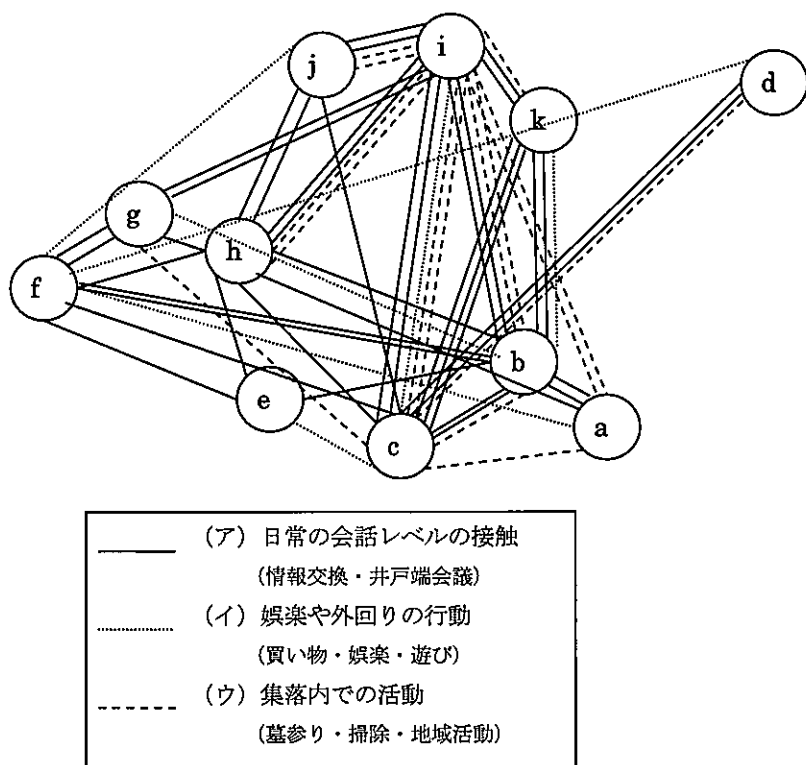


図2 世帯主、もしくはそれに準ずる構成員のソシオグラム（無向グラフ）

においては全く紐帯が存在しないという結果になった。自動車が普及するまでは一緒に買い物に出かける機会もあったが、個人が自動車で出かけられるようになると、そのような機会は失われていったという。「娯楽・遊び」に関しては、同世代の構成員が子供のころに遊んだ名残で存在しているだけで、異世代間での紐帯は存在しない。「墓参り・掃除」、「地域活動に一緒に行く」という項目では、一元化した無向グラフにおいて中心性の高かった i と c を核として関係が築かれている。ただし、この紐帯は中心性の比較的高かった家の間で形成されており、どの家とも紐帯をもたない家も数軒存在する。

このように、屋敷全体として濃密な関係を築いているのは、「情報交換」、「井戸端会議」という会話レベルでの接触によってである。その他の項目に関しては、同世代の「遊び」の集団や、60～70代の生活圏を共有する集団において限定的に形成されていると考えられる。

②有向グラフ

かつての同族理論と比較して現在の同族集団の依存・被依存の関係をみるために、日常生活において、構成員間で依存・被依存の方向性を含む5項目³⁾（「農作業」、「子供の面倒」、「お金の貸し借り」、「留守や緊急の場合に頼る人」、「重要なことを相談する相手」）について、方向性を矢印で表し、5項目を1次元にまとめたソシオグラムを作成した。「農作業を手伝う主体→労働力の提供を受ける者」、「子供の面倒を依頼する→依頼される」、「金銭を

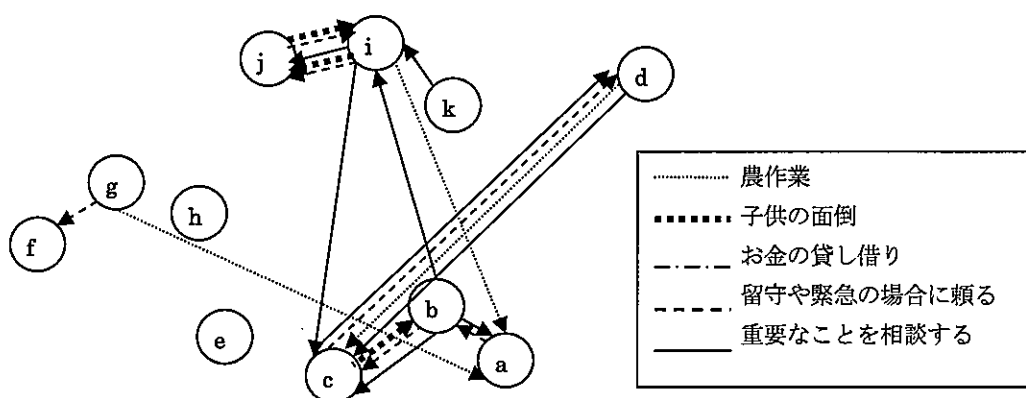


図3 世帯主、もしくはそれに準ずる構成員のソシオグラム（有向グラフ）

借りる→金銭を貸す」、「留守や緊急の場合に頼る→頼られる」、「重要なことを相談する→相談される」というように、ベクトルの向かう先を従属の対象となるように設定した。ネットワーク密度を無向グラフと同様にして算出すると、0.036となる。これは無向グラフと比較してかなり密度が小さい。依存・被依存という方向性を有した関係は、現在の屋敷ではそれほど形成されていないのである。

ネットワーク中心性について、中心性を「それぞれのノードの入次数」と定義すると、中心性の高い方から順に、「 $c \rightarrow i \rightarrow a \cdot j \rightarrow b \cdot d \rightarrow f \rightarrow e \cdot g \cdot h \cdot k$ 」となる。密度がかなり小さいこの有向グラフの中で紐帯が集中しているところは、 j と i 、 c と d など、直接的な本家と新家の関係（＝兄弟）によるところである。一方、 j と h 、 c と e など、直近ではないが血縁関係のあるところは、必ずしも紐帯が存在するわけではない。また、①と同様に、 b や c のあたりは結びつきが強い。 c 家や b 家の世帯主によると、このあたりは、屋敷内外を問わず近所づき合いが濃密であるらしい。

次に、各項目について見ると、紐帯の多くを占める「留守や緊急の場合に頼る人」、「重要なことを相談する相手」の項目については、その本家新家関係に加えて、 a と b 、 b と c の近隣関係や、生活圏を共有する b 、 c 、 i 、 k などの関係が機能している。一方、比較的若い世代（ $e \cdot h \cdot f$ など）では、友人や姻族など、屋敷外の人間を頼りにし、A屋敷にとらわれない外部とのネットワークを形成する傾向にある。

①、②に共通して、「30年以上前は全ての家と付き合いがあった（＝全ての家と紐帯がつながっていた）」（ i 家世帯主）が、子供世代、孫世代ではほとんどつき合う機会がない。つまり、A屋敷の関係構造は、30年以上前の関係が非常に濃密な状態から希薄化している過程で、今のソシオグラムが成立しており、今後はほとんど紐帯が引けないほど、接触機会は減少していくと考えられる。

③有力スコア（声価法）

構成員それぞれに、「どの家が有力か」を尋ね、それを得点化した。項目に関して1票集まったときに1点とカウントする。選択する数については制限をしなかった。調査対象者全員の結果を得点化して表にまとめると、次のようになる。

表1 有力スコア

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
3点	1点	2点	1点	1点	1点	3点	1点	3点	3点	0点

これによると、0点となったのはk家のみで、あとはみな1点から3点の範囲内にある。この結果からは明確な上下関係は確認できない。養蚕収入のデータ（豊富村教育委員会編1956）と有力スコアとの相関係数が-0.283であることから、かつての経済的優位性が現在の「有力」さを規定するものとはなりえないことが示される。養蚕の時代には経済的に裕福だったk家が0点であるという事実も、これを裏付けているだろう。

「有力」と判断した基準について、3点を獲得した4世帯をみると、

a…「金持ちだから」「土地を持っているから」「本家だから」⁴⁾

g…「本元だと思うから」「子ども（＝跡継ぎ）がいるから」

i・j…「子ども（＝跡継ぎ）がいるから」

などで、「有力」の基準は一定ではない。ただし、ここで確認できるのは、本家権威に対する分家の従属という垂直の関係ができないこと、有力の基準が経済性や系譜関係性や後継ぎの有無など一貫したものではない、という2点で、これが水平的関係を示していると結論づけることはできない。

以上のネットワーク分析をもとに、屋敷内の関係構造についてまとめておこう。

結合の形態としては、ネットワーク分析をみる限り、やはり有賀・喜多野理論のような垂直の関係は確認できないだろう。さらに、有力スコアと経済的優位性の相関度の低さを考えると、経済的優位性に基づく垂直の関係もまた屋敷の中では働いていないということになる。

そしてその関係構造について、現在の屋敷全体の日常的関係は、「情報交換」、「井戸端会議」という会話レベルでの接触を中心として築かれてはいるものの、全体としては接触・交流機会の減少が深刻化していくと考えられる。そのような趨勢で未だ濃密なネットワークを形成しているのは、60代～70代の生活圏を共有する農業従事者（i・k・b・cなど）で、比較的若い世代（e・h・fなど）は、友人や姻族など屋敷外部とのネットワークを形成する傾向にある、という選択的な関係が築かれ、屋敷全体でみると偏在的な構造をなしている。ただし、屋敷内では夫婦間で同質的なネットワークを形成しているという点で、個人が集団内で自由に関係を結ぶというものではなく、地理的要因や血縁的要因から拘束を受けながら、選択的な関係を形成していると考えられる。このように、屋敷内で緊密な関係を持つかどうかという問題には、世代と勤務地という要因が深く関わっている。

従来の手法では見えてこない構成員間の関係は、ネットワークの構造概念を用いることで、社会的交換の種類に応じた関係の濃淡や、個人の属性や地理的な位置との関連などの多くの要素を踏まえて、より詳細に捉えることができる。

4 A 屋敷の結合の維持に関する要因：ブール代数分析より

これまで言及してきたような関係構造の中で、どのような要素が A 屋敷の結合原理として働いているのだろうか。この点について、ヒアリング調査⁵⁾の結果と前述のネットワーク分析を照応させながら分析していく。

ヒアリングによると、ネットワーク分析において研究した「世代」と「勤務地」以外にも、結合を維持しうる何らかの要因として、いくつかの要素が挙げられる。A 屋敷の歴史や由来について興味・関心を強く持っている構成員は、若いうちから屋敷の行事やお祭りに参加して屋敷内の長老から詳しく聞いていたり、親や祖父から聞いていたりするケースが多い。親や屋敷内の長老などから屋敷に関する情報を継承することで、屋敷に対する興味・関心が促され、積極的に関与していくこととなりうる。したがって、まず屋敷内あるいは家庭内の「文化的継承」という要因が挙げられる。

また、A 屋敷が由緒ある家系であることに誇りを持っている、という意見から、由緒ある家柄としての「誇り」あるいは「アイデンティティ」が、集団への帰属意識を高め、結合力をもつ要因になっているとも考えられる。

屋敷内の結びつきを保つためにも行事の付き合いを続けていくべきだという考え方が、関心の高さにかかわらずほとんどの構成員の間で共有されていた。構成員は、時代の流れで簡素化していくのは仕方ないことだと受け入れつつも、負担にならない程度で行事を続けたいと思っている。この、行事という負担にならない程度の付き合いが、実は屋敷内の結合を維持する鍵となっていると考えられる。家業のような生活との直接的な結びつきではないため、都市化した生活様式に変化しても維持しやすいと考えられる。

また、「葬式のときには困ることが多いが、困ったときに助けてもらえるから屋敷のつながりが大切だと思う。組だと宗旨が違い⁶⁾、葬儀屋に頼むとお金がかかるが、屋敷内だとお互いの経済力がある程度知っているからやりやすいし、要望に合わせてやってくれる。」

(i 家世帯主の妻) というように、葬式の互助機能に期待しているという面も大きいようである。

そこで、ここでは「屋敷内の行事という場が結合の維持にとって大きな意味をもつ」として捉え、どのような要因が構成員の積極的行事参加を規定するのか、ブール代数を用いて説明していきたい。

A 屋敷の存続理由を明らかにするためには、行事への積極的な参加という一面的な部分だけではなく、消極的にでも参加させる強制（暗黙の了解）のメカニズムとともに論じるべきではある。屋敷内の凝集性をもたらしうる規範の中核に関しては、儀礼的な場で全世帯主に対して強くはたらく部分であり、ブール代数で見る世帯主の自主的参加、あるいは世帯主以外の参加へと向かわせる部分はあくまで周辺的でしかない。その中核で働く強制力というのは、積極的には参加したがないある構成員に対して制裁を加えようとするほど強大であり、実際毎回全員が必ず参加している。一方で、周辺部にはそれほど強い強制力はない。しかし、強い強制力のはたらかない周辺部においてどのようなメカニズムが生じているのか分析することで、強制（暗黙の了解）が強くはたらく中核の部分についても間接的に裏付けしうるだろう。

まず、独立変数 A～E と、従属変数 X を、以下のように設定する。

従属変数 X：行事への積極的参加

ここでは強制（暗黙の了解）の範囲外で、「自主的、積極的に行事に参加するか」を変数とする。世帯主の場合は必然的に参加する機会が多いので、それ以外の墓掃除・旅行などへの参加によって「0/1」を区別し、世帯主以外の場合は、それに加えて屋敷参りなどに参加することも判断基準とする。

表 2 独立変数の各項目

独立変数 A	世代	(0) 50代未満 / (1) 50代以上
独立変数 B	勤務地 空間的位置	(0) 勤務地・空間的位置が額田地区外 (1) 勤務地・空間的位置が額田地区内
独立変数 C	文化的継承	(0) 家族あるいは長老などから A 屋敷の歴史等についての継承を受けたことがない (1) 家族あるいは長老などから A 屋敷の歴史等についての継承を受けた
独立変数 D	誇り アイデンティティ	(0) A 屋敷が由緒あることに対して特に何も思わない (1) A 屋敷が由緒あることに対して誇りや満足感を感じている
独立変数 E	日常の付き合いの有無	(0) 屋敷内の人と日常生活で付き合いがない (1) 屋敷内の人と日常生活で付き合いがある

※独立変数 A は、構成員の世代割合に基づいて設定した。

独立変数 B について、空間的位置とは、主婦や農業従事者の場合は自宅周辺を意味する。

以上のように定義した上で、(1)「A：世代」，「B：勤務地・空間的位置」，「C：文化的継承」，「D：誇り・アイデンティティ」の 4 つ，(2)「A：世代」，「C：文化的継承」，「D：誇り・アイデンティティ」，「E：日常の付き合いの有無」の 4 つ，をそれぞれ独立変数として設定し、分析を行った。独立変数の組み合わせと従属変数における結果は、(1)においては真理表 I（表 3），(2)においては真理表 II（表 4）の通りである。

表 3 「行事への積極的参加」の真理表 I

行番号	独立変数				従属変数 X	X の比率 (%)	X の事例 数 (n)	事例数 (n)
	A	B	C	D				
1	0	0	0	0	0	0	0	3
2	0	0	0	1	0	0	0	0
3	0	0	1	0	0	0	0	1
4	0	0	1	1	1	100	1	1
5	0	1	0	0	0	0	0	1
6	0	1	0	1	0	0	0	0
7	0	1	1	0	0	0	0	0
8	0	1	1	1	0	0	0	1
9	1	0	0	0	?	25	1	4
10	1	0	0	1	0	0	0	0
11	1	0	1	0	0	0	0	0
12	1	0	1	1	?	50	1	2
13	1	1	0	0	?	50	1	2
14	1	1	0	1	0	0	0	3
15	1	1	1	0	1	100	3	3
16	1	1	1	1	1	100	4	4

表4「行事への積極的関与」の真理表Ⅱ

行番号	独立変数				従属変数 X	Xの比率 (%)	Xの事例 数(n)	事例数 (n)
	A	C	D	E				
1	0	0	0	0	0	0	0	4
2	0	0	0	1	0	0	0	0
3	0	0	1	0	0	0	0	0
4	0	0	1	1	0	0	0	0
5	0	1	0	0	0	0	0	1
6	0	1	0	1	0	0	0	0
7	0	1	1	0	?	50	1	2
8	0	1	1	1	0	0	0	0
9	1	0	0	0	0	0	0	4
10	1	0	0	1	1	100	2	2
11	1	0	1	0	0	0	0	2
12	1	0	1	1	0	0	0	1
13	1	1	0	0	1	100	2	2
14	1	1	0	1	1	100	1	1
15	1	1	1	0	0	0	0	1
16	1	1	1	1	1	100	5	5

まず真理表Ⅰについて分析しよう。矛盾を含む行について、50%を区切りとし、 $X=1$ となる割合がそれ以上であるものを $X=1$ として計算したところ、

$$\begin{aligned}
 & ABcd+abCD+AbCD+ABcd+ABCD \\
 & =ABcd+(a+A)bCD+ABC(d+D) \\
 & =ABcd+bCD+ABC=AB(C+cd)+bCD
 \end{aligned}$$

という式になった。

この結果、行事への積極的参加の条件は以下の3つのパターンである。

- ①50歳以上の世代+勤務地・空間的位置が地域内+文化的継承あり（行番号15, 16）
- ②50歳以上の世代+勤務地・空間的位置が地域内+文化的継承なし+誇り・アイデンティティなし（行番号13）
- ③勤務地・空間的位置が地域外+文化的継承あり+誇り・アイデンティティあり（行番号4, 12）

①のパターンは、「誇り・アイデンティティ」をもっていなくても行事へ積極的に参加することを示している。世帯主の世代であり自宅近くを生活圏とし屋敷内や家庭内で屋敷の会話がなされる、という、屋敷内の人とのつながりの要素を全て兼ね備えているパターンである。行番号15, 16の事例は、ネットワーク分析において高い中心性を示し、緊密なネットワークを形成していた構成員の事例がほとんどであり、その日常生活における関係性と行事参加を結びつける結果であろう。②のパターンでは、世代と勤務地が行事への積極的参加を規定する、と捉えられる。A屋敷の歴史に関して継承を受けたことがなく、由緒あることに対して特に何も思わない場合でも、世帯主の世代でかつ勤務地（生活

圏) 地域内であれば積極的に参加する, ということである。行番号 13 は, やはり前掲の濃密なネットワークの中に組み込まれている事例であり, ①と同様に日常生活における関係性が重要となってくる。③は, 空間的位置が遠くても, 文化的継承を受け由緒あることに誇りを感じていれば, 世代に関係なく積極的に参加する, と考えることができる。世代と空間的位置の条件を満たしていなくても文化的継承・アイデンティティによって成立するこの事例は, これからの屋敷の結合を考える上で非常に意味深いものだろう。

次に真理表Ⅱについて分析する。矛盾を含む行について, 50%を区切りとし, $X=1$ となる割合がそれ以上であるものを $X=1$ として計算したところ,

$$\begin{aligned} & aCDe + AcdE + ACde + ACdE + ACDE \\ &= aCDe + AcdE + ACde + ACE(d+D) \\ &= aCDe + AcdE + ACde + ACE \\ &= C(aDe + AE) + Ad(cE + Ce) \end{aligned}$$

という式となった。

この結果, 行事への積極的参加の条件は, 「親や長老から A 屋敷の歴史等について継承を受けたことがあり, 『由緒あることについて誇りに思っているが, 世帯主の世代ではなく, 屋敷内の日常で付き合いがないパターン』あるいは『世帯主の世代であり日常で付き合いもあるパターン』, 「世帯主の世代で屋敷が由緒あることに対して何も思っておらず『屋敷の歴史等を聞いたことがないが日常で付き合いがあるパターン』あるいは『屋敷の歴史等について聞いたことがあるが日常の付き合いはないパターン』」である。

世帯主の世代である場合, 「文化的継承がある」, 「日常生活で付き合いがある」, 「文化的継承があり日常生活で付き合いがある」の 3 パターンの要素と組み合わせさせて, 行事参加の条件となっている。つまり, 世帯主の世代であれば, 「誇り・アイデンティティ」はなくても文化的継承か日常的なネットワーク形成の少なくとも一方を満たせば, 行事へ積極的に参加する, と考えられる。実際, $X=1$ となる事例の大半が世帯主の世代であり, 「世帯主の世代であること」が大きく影響しているようである。

また, 「文化的継承」がある場合, 加えて「誇り・アイデンティティ」をもっているか, 「世帯主の世代」・「世帯主の世代で日常の付き合いがある」というパターンにおいて行事への積極的参加が確認できる。世代・日常的付き合いという条件を満たさなくても, 「誇り・アイデンティティ」をもてば積極的参加をする, というパターンは 1 事例のみだが, 真理表Ⅰの「文化的継承+誇り・アイデンティティ」と同じ結果が導き出される。屋敷内の文化的同族結合を促す要素として注目すべき点であろう。

5 結論

以上の分析結果から, 岡崎市額田地区における A 屋敷の同族結合のあり方について考察する。

まず, 結合の形態としては, ネットワーク分析をみる限り, 有賀や喜多野理論のような

垂直的關係は、近代化以前から確認できない。したがって、近代化による階層構造の崩壊という典型的なシナリオを経験することはなく、現在まで存在していると考えられる。現在では日常的な会話レベルでの接触を中心として紐帯が築かれてはいるものの、その関係構造は非常に偏在的である。緊密な紐帯を形成しているのは 60 代以上の農業従事者が中心であり、時代変化を辿ると全体としては接触・交流機会の減少の傾向にあり、今後はさらに深刻化していくと考えられる。つまり、日常面においては、近代化によって屋敷全体の結合は解体し、選択的で緊密な関係が作り出されているといえるだろう。

このように、日常面での結合構造が解体されていく中で依然として全体としての結合を維持しているのは、行事という非日常的で儀礼的な側面が大きい。行事という負担にならない程度のつき合いは、家業のように生活との直接的な結びつきではないため、都市化した生活様式に変化しても維持しやすいのである。ではその儀礼的な結合を促す要因は何か。ブール代数分析において、「世帯主の世代+日常のネットワーク/文化的継承」という組み合わせと、「文化的継承+誇り・アイデンティティ」という組み合わせが行事参加に影響を及ぼすという結果になった。したがって、結合を維持する行事への関与については、世帯主の「世代であること」と、世代は関係なく「文化的継承と誇り・アイデンティティがあること」の 2 つの要素が存在するのである。「世代」という要素が、ライフコース論の年齢に関する効果のうちの「コーホート効果」、すなわち緊密な関係を築いていた世代であるかどうかという問題か、世帯主であるかどうかという「加齢効果」の問題であるかは、現在の世帯主の世代では判断し難いが、文化的継承と誇り・アイデンティティという要素は、屋敷内の新たな世代を巻き込み、同族結合の維持・存続を捉えるのに重要な要素だろう。

今回は分量の都合上、個々の構成員に焦点を当てて分析したが、同族全体の結合力や凝集性を考えるには、集団としての行為や、価値観や規範について考慮する必要がある。ブール代数分析では直接的には説明できない強制（暗黙の了解）のメカニズムは明らかにすべき課題であるし、構成員の重視していた葬式の互助機能についてもきちんと分析する必要がある。また、今回はあくまで A 屋敷という特異な事例の記述に徹したが、その特異性を越えてより一般的に同族集団の意味を考えるには、三河地方の他同族団との比較研究が必要だろう。その際、同族だけに限定せず、村落構造論や地域類型論、家論、家族論なども考えながら地域社会の変容過程を辿れば、村落社会をめぐる他の問題と絡めて同族集団を捉えられるだろう。

【注】

- 1) ほとんどが世帯主のデータだが、a と k の家は諸事情により世帯主の協力を得られなかった。そのため、a 家・b 家に限っては、世帯主以外の構成員のデータをもとに作成した。
- 2) 男女間（主に夫婦間）の無向グラフのネットワーク中心性の相関係数と、有向グラフのネットワーク中心性の相関係数について測定したところ、それぞれ 0.648 と 0.950 となった。この数値からも男女間の相関度が高いことがうかがえる。
- 3) 依存・被依存の関係については、安藤ほか（1979）が指摘するように、葬儀に関する互助的な援助関係が重要な項目として挙げられる。しかしながら、A 屋敷においては、どの世帯で葬儀があっても全世帯が必ず全面的に援助することになっており、ソシオグラムの紐帯は全ての世帯の間に存在するため、有向グラフの項目からは除外した。
- 4) この場合の「本家（ボンヤ）」とは、総本家という意味ではなく、直近の「本家・新家（ホンヤ・シンヤ）」関係を指す。

- 5) 2007年10月31日(水)から11月12日(日)にかけて、A屋敷の構成員に対してヒアリング調査を実施した。その結果、計25人の構成員からの回答を得た。インフォーマントの基本属性を簡潔に記しておくと、70代が4人(うち男性1人)、60代が5人(うち男性2人)、50代が9人(うち男性4人)、40代が0人、30代が5人(うち男性3人)、20代が2人(うち男性2人)である。調査対象者全員に対して等しく質問した内容は、①経歴、②A屋敷の歴史的由来に関する内容、③屋敷内行事に関する内容、④屋敷内の人間関係、⑤地域活動に関する内容、である。④の屋敷内の人間関係については、記入用紙を用いて、日常生活における各世帯との交流・関係を尋ねた。また、A屋敷の歴史や地域に詳しい人に対しては、それらに関する内容についても質問した。
- 6) 原集落においては、他方のA屋敷を含め禅宗の家が多い。A屋敷は浄土宗である。

【文献】

- 愛知県史編さん委員会編、2005、『愛知県史別編3 民俗』愛知県。
- 安藤慶一郎・中田実・牧野由朗編、1979『地域の社会学——東海地方の社会学的研究』税務経理協会。
- 有賀喜左衛門、1971、『有賀喜左衛門著作集X 同族と村落』、未来社。
- 藤井勝、1997、『家と同族の歴史社会学』刀水書房。
- 原忠彦・末成道夫・清水昭俊、1979、『仲間』弘文堂。
- 長谷川善計・竹内隆夫・藤井勝・野崎敏郎、1991、『日本社会の基層構造——家・同族・村落研究』法律文化社。
- 河北新報社編集局編、1975、『むらの日本人——‘70年代・東北農民の生き方』劉草書房。
- 鹿又信夫・野宮大志郎・長谷川計二編、2001、『質的比較分析』ミネルヴァ書房。
- 河村望・蓮見音彦、1958、「近代日本における村落構造の展開過程——村落構造に関する『類型』論の再検討」『思想』407、408。
- 喜多野清一、1959、「同族団の構成と協力の態様」『大阪大学文学部創立10周年記念論議』大阪大学文学部。
- 、1976、『家と同族の基礎理論』未来社。
- 光吉利之・松本通晴・正岡寛司編、1986、『リーディングス 日本の社会学3 伝統家族』東京大学出版会。
- 前田卓、1965、『祖先崇拜の研究』青山書院。
- 宮田力松、1985、『近世農村青年の生活——愛知県の若者掟から』第一法規。
- 額田町史編集委員会編、1986、『額田町史』額田町。
- 高橋誠、1997、『近郊農村の地域社会変動』古今書院。
- 高橋明善・蓮見音彦・山本英治編、1992、『農村社会の変貌と農民意識——30年間の変動分析』東京大学出版会。
- 田中重好、2007、『共同性の地域社会学』ハーベスト社。
- 豊富村教育委員会編、1956、『豊富村誌』豊富村。
- 安田雪、1997、『ネットワーク分析 何が行為を決定するか』新曜社。

(青山真由美：名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程)